

大貫大樹著

『竹内式部と宝暦事件』

戸浪裕之

宝暦事件は、明和事件とともに、江戸中期における尊皇論者への弾圧事件として知られ、現在でも高等学校の日本史の教科書にも登場する著名な事件である。この二つの事件は、同時期に発生した社会的事件であること、当事者に崎門学派に連なる人物（竹内式部・山県大吉）が関係していること、近世中期の朝幕関係を考える上で格好の材料を提供することなどから、あたかも双生児のごとく語られることが多いが、直接的には何の関係もない。このことは、夙に歴史学者の星野恒が指摘していた。

本書は宝暦事件を主題としているが、戦前・戦後の宝暦事件研究を精査してその問題点を指摘し、〈竹内式部の生涯を通観しながら、彼の学問と人物とを垂加神道・崎門学に則して検討〉した上で、〈式部門弟の視点から宝暦事件の再考を試み、事件の実態に迫る事で宝暦事件の歴史的神学的意義を示す〉（終章・五〇七—五〇八頁）ことを目的にしている。戦前の星野恒『竹内式部君事蹟考』（富山房、明治三十二年）から、近年の林大樹『天皇近臣と近世の朝廷』（吉川弘文館、令和三年）に至るまで、宝暦事件を論じた先行研究は少なからず存在するが、評者の知るかぎり、思想と政治・社会の両面から、宝暦事件を解明しようとした専著という点では、恐らく最初であると思われる。この認識が正しいとすれば、宝暦事件に関する最初の本格的な研究として、研究史に位置づけることができよう。

著者の大貫大樹氏（以下、著者）は、垂加神道・崎門学研究を志す新進気鋭の研究者である。令和三年九月、著者が國學院大學に提出した博士学位申請論文「竹内式部の実践神学と宝暦事件」が基になっており、この博士学位申請論文に加筆修正を施して刊行したのが、本書である。

本書については、すでに『神社新報』令和五年四月十七日付六面にて、皇學館大学文学部松浦光修教授の書評が掲載されており、〈従来の研究は、史料を丁寧に押さへないまま、歴史の実相から乖離した観念的、かつ図式的な理解に終始しがちなところがあつたが、本書によつて、宝暦事件の背後に、「崎門学派内の複雑な人間関係」があつたといふことが、精密に解明されてゐる。その点、本書は、竹内式部と宝暦事件に関する明治以来の研究史上、劃期をな

す業績として、高く評価されるものとならう」と評価されている。評者は著者とは専門を異にしており、宝暦事件とは百年以上も隔絶した明治期を研究対象にしていて、宝暦事件をめぐる研究史にも通じていない。松浦教授の評に屋上屋を重ねるだけになるかも知れないが、ともかく評者なりに本書を紹介してみよう。まず本書の構成は、以下のとおりである(紙数の関係上、各章の節は除く)。

序 章 竹内式部と宝暦事件研究の課題

第一篇 竹内式部の学問と人物

- 第一章 若林強斎と玉木正英への入門
- 第二章 望楠軒からの「義絶」とその要因
- 第三章 『靖献遺言』の講説と「縋縊惻怛」
- 第四章 『奉公心得書』の成立と受容について
—附・『事君辯』翻刻—

第五章 『糺問次第』に見る忠節と理想

- 第六章 「中臣祓」の講説と「人欲私欲」の神学
- 第二篇 朝廷に於ける垂加神道と宝暦事件
- 第一章 靈元天皇と山崎闇斎の「生き勧請」
一條兼香と垂加神道・崎門学
- 第二章 松岡雄淵の学問と朝廷
- 第四章 竹内式部の思想受容とその伝播

第五章 桃園天皇への『日本書紀』御進講の「目的」

第六章 宝暦事件再考

第七章 宝暦事件後の朝廷と垂加神道

終 章 本書の成果と課題

まず本書の第一篇は、竹内式部の伝記的研究・思想史的研究を主題としたもので、時系列的に竹内式部の学問思想とその人物像に迫り、式部門弟の思想的背景を明らかにする。宝暦事件の研究史を検討した著者は、〈これまでの研究では竹内式部について彼の学問である垂加神道・崎門学に則した基礎的な検討が殆ど為されておらず、それ故、式部に学んだ公家が御進講を奉仕する「目的」、さらにその御進講を望まれる桃園天皇の大御心といつた宝暦事件の根幹にかかる点も明らかにされていなかつた〉(終章・五〇七頁)とし、本篇を宝暦事件研究の「基礎的研究」と位置づけている。第二篇は、宝暦事件の政治史的・社会史的研究を意図したもので、まさしく宝暦事件の研究である。著者は事件に至る展開を、式部門弟の視点から、文化動向・政治動向、公家社会内部の動き、朝廷と垂加神道、また崎門学派内部の動きを加味しながらその道程を検討している。単に宝暦事件のみを取り上げるのではなく、その前史と後史にも及んでいるが、とりわけ前史の検討が大きな比

重を占めている。これまた著者の言によれば、「これまでの宝暦事件研究では、事件後の影響は指摘されながら、事件前史への視点は未だ乏しいのが現状」であり、近年の研究で前史として桜町天皇の御代が注目されているのを承け、〈式部門弟は桜町天皇へ奉仕する中で、如何なる感化を天皇とその御治世から受けていたのか。この点も宝暦事件を見る上で欠く事は出来ない〉(終章・五〇七頁)という問題意識に基づくものである。そしてこの両者を区別せず、思想と政治・社会の「ダイナミックな絡み合い」(阪本是丸「近世・近現代神道史研究の概観——『現代神道研究集成 第三巻』解説——)を通して、宝暦事件の解明をめざしている点が、本書の大きな特色であると言えよう。

書評では定番となる各篇各章の内容紹介であるが、これについては、著者が「終章」で明確にまとめている。これを参考にしながら各篇の内容を紹介し、評者なりにいささかコメントを付してみたい。

竹内式部の伝記的・思想史的研究である第一篇では、式部が山崎闇斎以来の神儒兼学の学風を正統に受け継いだ垂加神道家であることが明らかにされている。式部に特徴的な実践を志向する気風と強い現実に対する関心は、二人の師、すなわち若林強斎と玉木正英からの強い感化と、徳大寺家に仕えることで養成されていった。式部は現実社会の

問題を的確に把握することに長けており、体認した学問に依拠しながら、現実の問題を克服すべく学問の実践に努め、「縋縊惻怛」の精神から垂加神道の神学を真の美学に高めた点に、式部の真価があるとする(終章・五一二頁)。ここにいう「縋縊惻怛」とは、もともと朱子の言(『楚辞集注序』)であるが、浅見絅斎が重視し、その主著『靖獻遺言』の眼目とされているもので、本書全体のキーワード、もしくはライト・モチーフになつてゐる(本書において、この精神に注目することは、序章・四二一四四頁に説明がある)。この点に注目すれば、本篇は、式部において「縋縊惻怛」の精神がどのように形成され、彼の思想を直接伝える各史料にいかに表出されているかを明らかにしたものと言えよう。

著者が「終章」で述べていることであるが、本書で取り上げられなかつた式部の講義筆記や著書が、まだ各地に残されており、著者はこれらの考察を予告している。そもそも崎門学派・垂加神道を研究する上で障害となるのは、研究史料となるテキストの問題である。講義筆記を中心とするこれらのテキストは、崎門学派・垂加神道の思想が率直に表される重要な史料であるにもかかわらず、その多くが未刊行に属し、それが研究の進展を阻む大きな要因の一つとなつてゐる。したがつて、いまだ整理が十分行き届いてゐるとは言えず、そのためには、写本の系統やその本文批

判を含めた書誌学的考察が不可欠となる（清水則夫「闇斎学派研究の諸問題」）。こうした史料の翻刻や整理なども、近年は少しづつ進められているようであり、著者もまた『奉公心得書』の異本である『事君辯』（東京大学史料編纂所蔵）を考察し、これを翻刻している。松浦教授は（春秋に富む著者が、さらに精勵を重ねて『竹内式部全集』、あるいは、『宝暦事件関係史料集』のやうなものを、いつの日か学界に提供してくれるのではないか……と、私は密かに期待してゐる）と述べておられるが、評者もまた、それに期待している一人である。

第二篇は、一言すれば、宝暦事件を軸として、近世朝廷における垂加神道・崎門学の受容・展開の過程を明らかにしたものである。朝廷内で山崎闇斎の教えを受けた公卿たちは、闇斎がそうであつたように、垂加神道（神学）と崎門学（道義）を実践し、「繩緹惻怛」の精神で天皇の大御心に寄り添い、「君臣合体」していたことを、靈元天皇の「生き勧請」、桜町天皇の御治世、桃園天皇への『日本書紀』御進講、光格天皇の「復古」の事例から考察し、彼らが天皇から御信認を得たことで、垂加神道が朝廷内に広く受容されたことを指摘している。これは、垂加神道が近世を通じて大御心を実践する神学として機能していたことの証であり、かくて正親町公通、一條兼輝・兼香父子、松岡雄淵、

竹内式部とその門弟らの尽力により、「達此道於天朝」という闇斎の遺志が達成されたとする（終章・五二〇—五三二頁）。本篇は、数少ない史料を読み込んで史実を明らかにし、思想と政治・社会の「ダイナミックな絡み合い」のもとで、朝廷における垂加神道の受容・展開の過程を近世政治史に位置づけた点が注目される。したがつて本書は、近世思想史研究のみならず、近世天皇研究・近世朝廷研究にも、一石を投ずるものであろう。

本篇でも、「繩緹惻怛」は重要な位置を与えられている。著者にとって思想と政治・社会の間を架橋する概念が、この「繩緹惻怛」なのである。したがつて本篇は、垂加神道・崎門学を受容した朝廷という社会において、「繩緹惻怛」の精神が、いかに具現化したのか、その精神が宝暦事件のみならず、その前後も変わらず流れていったことを明らかにしたものと言える。その意味で本篇は、「繩緹惻怛」をめぐる近世朝廷の精神史的研究とも言えよう。

また本書全体を通じて注目されるのは、朝廷内の垂加神道について、「伝統的垂加神道」と「新垂加神道」という枠組みを設け、式部を「新垂加神道」に含める見解（磯前順一・小倉慈司「正親町家と垂加神道」）を、著者は真正面から取り上げて検討し、このような枠組みが成り立たないこと

本書は一見すると、竹内式部と宝曆事件に関する思想史的・政治史的研究のように思われるかもしれない。しかし、その点だけを見るのは誤りであろう。本書は「神学的研究」でもあるからである。本書は、近世国学者の業績が注目されてきた戦後の神道神学研究に対して、「垂加神道家の業績もまた「神道神学」（序章・四〇頁）であるという立場に立ち、神道神学としての垂加神道研究を開拓しようという意欲に溢れている。著者はこれを本書の目的で明言しているほか、平泉澄博士（「思想史」）および近藤啓吾氏（「山崎闇齋の研究に志す学徒に贈る辞」）の研究態度を踏まえて、次のように宣言している。

本書を一貫する研究視角とは、中心となる式部の「人物の性情を理解」しようとするもので「之に同感」するものである。本書では式部の「性格をよく理解し得る」為にも、彼の「信仰を重視」して「闇齋の志」を「紙上に求めんとするのではなく、みづからの身に求め」、垂加神道の「宗教思想に入らう」とするものである。即ちその立場は岸本（英夫）氏が言うところの「信仰の立場からの研究」であり、通底する研究態度とは「神学的研究」である（序章・四〇頁。文中の（）は評者）。評者は、本書における著者の眞の志が、ここにあると見てるのであるが、それは邪推であろうか。このような研

究視角を以てする以上、信仰の問題を取り扱うことになるのは必然であり、ここに「神学的研究」がクローズ・アップされる所以がある。著者の立場を見る上で、この点を見逃してはならないと考える。

それでは本書では、「神学的研究」とはどのように考えられているのか。本書では、「実践神学」・「歴史神学」という用語が使用されている。これは上田賢治博士の説く神道神学の構成に従つたものではあるが、本書では、「垂加神道家が如何に「現実が対応を迫る形で提起して来る諸問題」に「闇齋の志」、即ち「原理」を抱いて対応したのか、という実践神学の展開を追う。この事は歴史神学の営みである事も附言しておきたい（序章・四一頁）と規定している。要するに、江戸時代という「歴史」の中で、「垂加神道家が如何に「現実が対応を迫る形で提起して来る諸問題」に「闇齋の志」、即ち「原理」を抱いて対応したのか」を追究することが、本書でいう「神学的研究」である。

一般的に主観的かつ規範的な研究とされる「神学的研究」と、客観的かつ記述的な研究をめざす「思想史的研究・政治史的研究」とは、基本的に相容れないもののようを考えられている。「神学的研究」を併せ持つ本書の立場は、「実証的」研究を標榜とする後者の立場から異論があるところかもしれない。また前述のような「実践神学」・

「歴史神学」の考え方・捉え方にも、神道神学研究の立場から異論が出てこよう。これに関連して「神学的意義」まで踏み込むからには、本書の成果が、神道神学の構築にいかなる貢献をなし得るかという課題も残されているようと思われる。もつともこれらの点は、評者が指摘するまでもなく、すでに著者の念頭に置かれているに違いない。

最後に、本書の目的である「宝暦事件に於ける歴史的神学的意義」について、著者の見解を紹介しておこう。これが本書の結論となるものである。

式部門弟は竹内式部の師風を受ける事で、垂加神道の神学に依拠しながら、現実の「政」に対し、その問題克服を試みて、実践に努めていた。彼らの『日本書紀』御進講とは、朝廷による「政」の主体性を強く主張し、以て「祭政一致」を実現しようとしていた本格的な動きであり、それまでの朝廷内に於ける垂加神道動向を一歩進めたのである。「縉縫惻怛」の精神で実践神学に努めた竹内式部と式部門弟による神学的意義はここにある。……／宝暦事件は思想的に倒幕までには至らず、また幕末維新期とは対外情勢も異なる。だが、式部門弟の「政」は正化を目指す志向性とその実践面は「神武創業」の精神に基づいて「大政奉還」、「祭政一致」を実現した明治維新の先駆を為すもので

あつた事は確かであり、事件の歴史的意義はここにある（終章・五二四頁）。「」は改行箇所。

以上、雑駁な紹介に終始し、誤読を犯してしまったかもしれないが、専門を異にする評者が、書評としてコメントできるものは、前述のように些細な点にすぎず、文字どおり「感想」にすぎないものである。繰り返しになるが、本書は宝暦事件に関する最初の本格的な研究であり、単に宝暦事件のみならず、垂加神道研究・崎門学研究はもとより、近世天皇研究・近世朝廷研究にも一石を投げる意欲的な研究である。また神道神学としての垂加神道研究を開拓しようという意欲にも溢れている。今後の垂加神道研究・崎門学研究・近世天皇研究・近世朝廷研究は、本書を通過せずに論することはできないであろう。本書の議論から、新たな研究が展開する可能性も大きいと思われる。優に五〇〇頁を超えているが、「偽りの部厚さ」とは無縁の、まこと充実した大著である。

（錦正社、令和五年一月、A5判、五五六頁、本体一〇〇〇円）

（明治神宮国際神道文化研究所研究員）